

『異邦人』における「太陽」

古野, 千恵

<https://doi.org/10.15017/8805>

出版情報 : Stella. 24, pp.139-146, 2005-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :



『異邦人』における「太陽」

古 野 千 恵

『異邦人』を彩るイメージのなかでも〈太陽〉は特に注目されてきた。たとえば、ロラン・バルトは埋葬・浜辺・裁判という3つの挿話をとりあげ、太陽がそれぞれの挿話を支配し、古代神話やラシーヌ『フェードル』のように小説の運命をつかさどると読み解く¹⁾。またカミュの小説世界では、夕暮れや月光は肉体的・精神的緩和に、いっぽう地中海特有の灼熱や光は暴力的・破壊的感覚に結びつくが、とりわけ『異邦人』ではこの傾向が顕著であるとベイノン・ジョンは強調する²⁾。そしてジョンと同様にスティーブン・ウルマンもまた太陽の視覚的イメージに着目し、幻覚的な光が殺人の誘因として設定されたと考える³⁾。このように強烈かつ幻惑的な陽光と関連づけて主人公の行為を説明しようとする言説はあったが、いずれの場合も、ムルソーが太陽を殺人の動機としたのは「彼にとって有効な説明の唯一の型」(ロベール・シャンピニー)⁴⁾だったからとされる。しかしながら、なぜムルソーが自分の滑稽さを承知しつつ「太陽のせい」といわざるをえなかったのか。この問題についてはなお再考の余地があろう。とくに太陽がムルソーに直接的にあたえた影響、身体的苦痛という側面については、いまだ十分に検討されたとは言いがたい。ゆえに本稿では、身体的苦痛がムルソーをどのように精神的に追いつめるのか、そして彼はなぜ太陽を殺人の動機とするのかという問題をとりあげ、あわせて逮捕後のムルソーに認められる変化についても考察したい⁵⁾。

＊

『異邦人』の検証に先立ち、カミュ初期作品における太陽の位置づけを確認しておこう。まずエッセー『裏と表』での太陽は、カミュの幼年時代を支配する、いわば「貧苦と光の世界」の象徴として登場する。その豊かに降りそそぐ光は

あらゆる怨恨を奪いさり、キリスト教的な〈歴史〉がすべてではないことを少年カミュに教えてくれる。しかし初期作品における太陽は人を幸福へと導く、いわば保護者的な役割を果たすだけではない。たとえば『結婚』と題されたエッセーでは、たしかにチパザでの陽光は生の喜びをもたらしはするが、草花の強い刺激臭とあいまって人びとの息を詰まらせる。頭上では「太陽と色彩のシンバル」が鳴り響き、身体も精神も休まることがない。またジェミラでは、日の光は風と結びついて目を焼き、肌を乾燥させ、その熾烈さが生命力を使い果たさせる。さらに「アルジェの夏」や「砂漠」の挿話では、「生きることへの絶望」なしに「生きることへの愛」はないという真理が太陽とともに示される⁶⁾。このように『結婚』での太陽はむしろ「否定」の領域におかれていると見なせるが、この傾向はさらに戯曲『誤解』でいっそう強まる。主人公マルタは「何もかも焼き尽くし」「心まで食いつくす」存在として「太陽の国」に憧れつづけ、また兄のジャンは「太陽の国」について語ったがために殺されてしまう。このように初期作品に共通して〈太陽〉は、あらゆる存在を衰弱させ焼尽する凶暴かつ過酷なイメージをもつのである。

では、太陽のモチーフは『異邦人』ではどのように扱われているのだろうか。物語の冒頭からムルソーの背後には太陽がある。まずは母親の埋葬の場面を見ると、「空にはすでに陽の光が満ち」[1135]「溢れるような太陽は風景を慄かせ、非人間的に衰弱させ」[1136]と描写される。むきでたタールは溶けてねばねばし、葬儀の参列者の顔からは汗が吹き出す。「あらゆるものがべとついたイメージ」⁷⁾というバルトの指摘のとおり、この場景での太陽はいかなる物質をも溶かしてしまう。さらに『結婚』のチパザでの太陽のように、刺激臭——「車についた皮や馬糞の臭い、ニスの臭い、香の臭い」——と共にムルソーの嗅覚を襲い、視力と思考とを混乱させてしまう。そればかりか、彼は「こめかみには血が脈打つ」ほどの身体的変調をこうむるのだ。たしかに、ここでの太陽は溶解や粘性のイメージをとめない、主人公に身体的苦痛をあたえる否定的な存在として提示されているが、しかしその強度は理性を失うほど耐え難いものではない。ところが海水浴のシーンになると一転して異なる側面が現れる。はじめ太陽は「暑すぎず」[1150]、むしろ水と結びついて心地よいものとして登場する。「生温く、長くてゆるやかな波」が打ち寄せるなかで、ムルソーとマリーは「泳ぎながら、波頭で水をふくみ、口に水泡をいっ

ばいためこんでは」「その水を空へ向けて噴きあげ」で遊んでおり、その水は「泡のレースのようになって空中で消えたり、生暖かい滴」となって顔の上以降ってくる。ふたりは口づけし、身体を寄せあい、波のなかをころがりまわって時を過ごす。小説のなかでも数少ない幸福感にあふれた一幕である。

では、ムルソーがマソンの別荘へ遊びに行き、アラブ人を殺害するまでの一連の場面を見ていこう。まずはその冒頭――

僕は太陽によって爽快になるのを感じ […] 顔を空へ向けていると、僕の口もとまで流れてくる水のヴェールを、太陽が払いのけてくれるようだった。 […] マリーの体のほてりと、太陽の熱とのせいで、僕は少しうとうとした。[1162-1163]

前述した海水浴の場面と同様に、ここでの太陽もまた冷たい水と結びついて、はじめは主人公に快感をあたえている。だが昼食後、彼がマソンやレイモンとふたたび浜辺へ行くと、太陽の様子は同前ではない。「太陽の光はほとんど垂直に砂の上に降りそそぎ、海面での煌めきは耐えられぬほど」であり、ムルソーは「地面から立ちのぼる石の熱気で、ほとんど息もつけなかった」[1164]。やがて「直射する太陽のせいで」思考は半ば麻痺する――「僕は何ひとつ考えられなかった、なぜなら帽子なしの頭に直射するこの太陽のせいで、半ば眠っていたから」。そしてアラブ人たちの距離が縮まるにつれて「熱くなりすぎた砂は赤く見え」、喧嘩のあいだ「烈日のもとに釘づけにされ」[1165] てしまう。その後、負傷したレイモンとともに、ふたたび浜辺へ出るとさらに日差しは厳しくなり「太陽は圧倒的」になっている。いまや大気ばかりでなく、大地や海にいたるまで圧倒的な太陽の力に支配されている。ここで再度アラブ人と出くわすが、そのさいのレイモンとムルソーの態度は対照的である。興奮してアラブ人を殺そうとするレイモンに対し、ムルソーのほうは「よせと言ったら、彼は逆上してしまい、きっと撃ち込むにちがいない」[1166] と冷静に判断する。発砲しないようレイモンを説得し、ピストルをあずかって最悪の事態を回避しようとする。ムルソーは「この瞬間、引き金を引くこともできるし、引かないでもすむ」と考えるものの、結局アラブ人が逃げ出したことで事態は収拾する。ムルソーはいったん別荘へ戻りかけるが、このとき「陽の光にやられて、頭ががえんがえんしていた」……。

ついに太陽の攻撃がはじまる。どこにいても「目をくらますような光の雨」

と「耐えられぬほどの暑さ」から逃れられないという思いに駆られて、ムルソーは浜へと歩きだす。海や浜辺では依然として「すべてが赤くきらめいている」[1167]。いっぽうムルソーの苦痛のほうはしだいに激しさを増す。涼を求めて岩のほうへ向かおうとするが、「太陽のもとで額が膨れ上がるよう」になり、容赦なく襲いかかる暑さに彼は歩みをはばまれる。さらに彼は顔に熱気を感じずるたびごとに——「歯を食いしばり、ズボンのなかでこぶしを握りしめ」全力を尽くして耐えようと試みる。苦痛を与え続ける太陽は、さらに「不透明な酔い心地」を注ぎこみはじめる。ムルソーは過酷な外界を拒絶しようとむなしく試みるが——「砂や白い貝殻やガラスの破片から、光の刃がひらめくごとに顎が引きつった」。ようやく彼が太陽から逃れ、影と憩いを岩陰の泉に見出したとき、またもや例のアラブ人が現れる。ムルソーは「もう事は済んだ」と思っていただけに事態に驚くが、相手が体を起こすと、彼はレイモンから預かったピストルを反射的に握りしめる。次の瞬間、「自分が回れ右をしさえすれば事は終わる」と考え、事件を回避しようとする意識が働くのだが、「太陽の光に打ち震えている砂浜が後ろに迫って」[1168] いて踵を返すことができない。まるでデルフォイのアポロンの神託によってアルゴスの道へと追いやられるオレストのように⁸⁾。

前進しかできない窮地のなか、5, 6歩泉のほうへ進むと、またもや太陽の猛撃にあう——「太陽の焼けつくような痛みが頬に広がった」。このとき太陽が、母親の埋葬のときと同じ影響を主人公にあたえていることは注目に値する。あのときも、ムルソーはこめかみに血が脈打つを感じたが、今はもっと強く全身の血管が脈打つ——「ありとあらゆる血管が皮膚の下でいちどきに脈打っていた」。もはや耐えることができない「焼けつくような痛み」によって、とうとう彼は一步前へ踏み出してしまう。もちろんこの行為の無意味さをムルソーはよく理解している。しかしそれでも「一步、ただ一足」前に踏み出してしまうのだ。この一步でアラブ人が匕首を抜き身構えると、その刃は光を反射し、跳ねかえった光がまるで「きらめく長い刀」のようにムルソーの額に迫る。その瞬間、「涙と塩の帳とで僕の目は見えなくなつた」。今となって感じることはできるのは、「額に鳴る太陽のシンバル、それから匕首からほとばしる光」のみである。静寂が支配する世界のなかで視界が閉ざされ、全身の感覚も麻痺してしまったとき、ついにムルソーは止めを刺される——「焼けつくような剣は

僕のまっげを噛み、痛む目をえぐった」。このときすべてがゆらめき、海は重苦しく焼けつくような息吹を運んでくる。まるで空が「端から端まで裂けて、火を降らすかと思われた」ほどだった。ムルソーの体は——「全体がこわばり、ピストルの上で手が引きつった」。次の瞬間、引き金がひかれ「乾いた、そして耳を聳るような轟音」が鳴りわたる。このあと皮肉なことに、彼はようやく太陽を汗とともにふり払うことができたのだった。

このように発砲までの過程を見てくると、主人公の殺人に太陽の力が大きく影響していることが分かる。はじめ異様な静寂のなかで光はムルソーを盲目にする。やがて彼の肉体は眩い光に硬直し、苛烈な陽射しのもとらす激痛に耐えられなくなる。「歯を食いしばり、こぶしを握りしめ」でどうにか理性を保とうとするものの、太陽は頭や顔、皮膚と身体をくまなく攻撃しつづける。まずは身体の一部が崩され、しだいに身体全体の自由が奪われ、ついには犯罪を犯すまいとする理性までも打ち碎かれる。つまり意思とは関係のないところで、背後に迫る巨大な力に導かれるように殺人は起こってしまうのである。

これほどまでに殺人に関与した太陽は、しかし以後すっかりその影をひそめてしまう。刑務所の戸外には「陽光がみなぎっている」[1184]ものの、事件のときのように太陽が過酷な姿を見せることはない。かろうじてカーテンや日よけから漏れる光を介してその存在が感ぜられるにとどまる。とはいえ主人公が太陽の支配から完全に逃れられたというわけではない。なぜなら、弁護士との接見や予審判事の尋問、そして法廷での審理などの場景においても、ムルソーはしばしば「暑さ」に襲われるからだ。はじめて弁護士が刑務所に来たときも独房のなかは「暑かった」[1172]し、予審判事の部屋もまた「薄いカーテンでわずかに和らげられた光で満たされ」[1173]ていて「ひどく暑かった」。そして判事が十字架を取りだして説教をはじめたとき、ムルソーが彼の理屈を全く受けつけないのも、「暑かった」[1175]からと語られている。さらに判事が信仰の有無を詰問する場面では、話し相手を「厄介払いしたいときにいつもするように」偽った返答をするが、ムルソーがそうしたのも「暑さはますますひどくなってきた」からである。

興味深いことに、こうした間接的な太陽の脅威は法廷の場景ではいっそう顕著になる。「太陽はところどころから漏れ入り」[1184]、空気は「息づまるよう」である。裁判が開始すると「暑さは増して」[1187]いき、審理が進行していく

につれて「熱気だけが一段と猛烈になって」[1188] 顔中から汗が吹きだす。しだいに強まる暑気のなかで、ムルソーはまたもや太陽の支配下におかれたかのような感すらあるが、犯行時とは決定的に異なる点がある。すなわち太陽の影響は、けっして混乱や破壊をもたらさないのである。たとえ耐え難いほどの暑さとなっても彼の思考や感覚は麻痺することはない。「暑さ」はつねに判事や弁護士、法廷にいる人びと全員に共有される感覚であり、事件のときのようにムルソーひとりが責苦に苛まれるということはないのである。

そのいっぽう逮捕後の主人公には心理的な次元で顕著な変化が生じる。ムルソーは以前とは違ってもはや輝く太陽を求めることがなくなり、和やかな夕暮れに心地よさを見いだすようになる。とりわけ死刑判決の後、この傾向はいっそう強まる。「昼から夜へとうつる色彩の凋落を眺めること」[1202] で、彼は一日を過ごすようになる。死刑についてあれこれ思いを巡らすときも、夕暮れの空を見ながら、心の平静を取り戻し、べつのことを考えようとする。そして太陽が姿を消した夜空にこそムルソーは平和を見、安らかな気持ちにひたるのである。彼は自身の人生と満天の星空とのあいだに、あたかも兄弟のような類似性を感じとり、自分はこれまでも幸福だったし、今なお幸福であると、ついに信ずることができたのである。

＊

カミュの初期作品と同様に『異邦人』でも太陽は、主人公に身体的苦痛をあたえ、試練を課す役割を担っているといえよう。しかしながら同作では、アラブ人の殺害を境にして太陽の描かれ方が大きく変化する。犯行の直前まで太陽は激しく圧倒的な力でムルソーを責めさいなむ。アラブ人も陽光を浴びているのに、ただひとりムルソーだけがこの試練に晒されているかのような筆致である。彼が身体の激しい痛みにも耐え忍んでいる箇所は、じつは草稿の段階では存在せず、後になって加筆された部分である⁹⁾。するとカミュが太陽の攻撃をデフォルメした身体感覚を介して表現しようと思ったのは、ムルソーに殺人は「太陽のせい」と言わせるための布石が必要だと想を新たにしたらからではないだろうか。というのも、ひとつの個がしだいに強まる痛みにも耐えきれず、ついに破裂する臨界点にいたって殺人が起きるが、この構図は悲劇における太陽

の役割を強調し、ムルソーの無動機の殺人をいっそう強く読者に印象づけるからである。

殺害後は一転して、太陽が凶暴な姿を見せることはなくなり、代わって夕暮れや夜の穏やかな空がムルソーを世界と和解させる。ベイノン・ジョンの解釈に倣えば、ムルソーの精神的平穏が夕暮れや夜空と結びつき、自然の平静と調和しているといえようが、しかしここで注目したいのはむしろ太陽の役割の多様性である。カミュの初期作品群に見られる太陽は、アルジェリアのまばゆい光の世界で過ごした青春期にその起源を見いだすことができる。地中海特有の気候や風土との関連から太陽の魅力が語られるが、太陽はそうした生命力の象徴にとどまらない。作家は燦々たる太陽が影を作りだすことを見逃さず、貧困や孤独、病の存在をそうした深い影として描き出している。かかる両義的な性格は『異邦人』でも、愛へ誘う陽光と死の宿命を告げる陽光として形象化されたことは、すでに見たとおりである。

アルジェリアを離れたカミュが、戦争の悲惨（ドイツのナチズム、フランス政府による植民地への弾圧、強制収容所に象徴されるソ連の圧制）を知ったとき、少年時に生きる意味を教えてくれた輝かしい〈太陽〉は永遠に奪われてしまったのだろうか。同時代の証人として過酷な現実に向かいあった作家が『転落』に描いたのは、もはや光の世界ではなかった。『追放と王国』でも太陽は夏のさわやかさも生の喜びも生みだしはしない。初期作品から後期作品への移行にともない、〈太陽〉の象徴的な価値は大きく変化するが、この前兆はすでに『異邦人』に現れていたのである。

註

- 1) 第1の役割は、埋葬の場面でみられるように、物質を溶かしてべたつかせることであり、第2の役割は、浜辺で海を剣に、砂を鋼に、さらに人間の行為を殺人にいうように、あらゆるものを金属に変えることを担う。そして最後の役割として裁判の場面では、太陽は粒子となり、弱々しい光線となってしまうのである。Voir Roland BARTHES, «L'Étranger», *roman solaire*, in *Œuvres complètes*, Paris : Éd. du Seuil, 1993, t. I, p.400 (paru d'abord dans le *Bulletin du Club du meilleur livre*, n° 12, avril 1954).
- 2) Voir S. Beynon JOHN, «Image and Symbol in the Work of Albert Camus»,

French Studies, vol. IX, n° 1, January 1955, p. 136.

- 3) Voir Stephen ULLMANN, *The Image in the Modern French Novel. Gide, Alain-Fournier, Proust, Camus*, London : Cambridge University Press, 1960, p. 250.
- 4) Robert CHAMPIGNY, *Sur un héros païen*, Paris : Gallimard, 1959, p. 98.
- 5) 『異邦人』のテキストとしてはプレイアッド版収載のもの (Albert CAMUS, *Théâtre, récits, nouvelles*. Édition établie et annotée par Roger QUILLIOT, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1962 [nouvelle éd. 1967], pp. 1123–1212) を用い, 引用箇所は同版の頁数を本文中 [] 内に示す。ただし同一頁からの引用が連続するばあい, 最初の引用にのみ出典を付す。引用における強調の傍点はすべて引用者による。なお訳出にあたっては, 窪田啓作訳 (新潮文庫, 1954 年) を参照したが, 文脈によっては筆者が改変を施した箇所がある。
- 6) Voir Bernard PINGAUD, «*L'Étranger*» de Camus, Paris : Hachette, 1971, p. 18.
- 7) BARTHES, *op. cit.*, p. 400.
- 8) Voir CHAMPIGNY, *op. cit.*, pp. 99–100.
- 9) 該当箇所は, ムルソーが涼を求めて岩陰の泉のほうへ歩みはじめてから, アラブ人と出会うまでの段落であるが, これは第 1 稿には存在しない。Voir les «Notes et variantes», in CAMUS, *op. cit.*, p. 1924 (note 1 pour la page 1167).